

# 吹田殿という王国があった

新山ひろし



枯れて尚、太い幹で堂々と立つ樟の木

吹田市内本町三丁目、ここに泉殿神社のお旅所・大の木神社がある。樹齢700年の樟の大木は、昭和9年の台風で破損し、枯れてしまったが、今もなお、威厳を見せている。その根元には「吹田殿址」の石碑があり説明板に「当地は神崎の流れに沿い、平安時代、川に南面して広壮豪華を極めた寝殿造り、西園寺公経、実氏の別荘・吹田殿のあった処である」とある。吹田殿とは何なのだろう。今回は、この「吹田殿」の記憶を巡り、樟の木が生きていた時代へ

向かおうとする、ささやかな旅である。

## 吹田殿は美しい「山荘」だった

「増鏡」には吹田殿の風情が美しく描写されている。

「河に臨める家なれば秋深き月のさかりなどは、ことに艶ありて、門田の稲の風になびく気色、妻とふ鹿の声、衣うつ砧の音、峯の秋風、野辺の松虫、とりあつめ、あわれそいたる所のさまに、鶉飼などおろさせて、篝火したる川の面」

風光明媚な山荘では、豪華な遊びがなされ、御嵯峨・後深草・龜山などの歴代上皇たちが再三、招かれていた。うーん、この山荘の何がよかつたのだろう。藤原定家も上皇のお付きで何度も訪れ、彼の専有する小屋まで持っていた。

定家は「明月記」の「寛喜2年（1130）閏正月」の項に「公経は、理由もなく遊樂に出かけており、宮中でも評判になつてい」と、その乱行を露骨に嘆いている。

一体、公経らは、この吹田殿で何をしようとしていたのだろう。「明月記」には、「乱舞」という言葉が出てくる。酒を飲み、歌い、踊り、無礼講の宴を繰り返すことだと推測できる。定家は、すぐ側の江口の遊女を呼び寄せ、連泊となつた彼女たちを化粧の手配までしている。公家たちは「方違い」、つまり、旅する時の良い方位のために、この吹田殿で一夜を過ごした。しかし、それは名目だけのようで、結局は「乱舞」と相成つたのに違いない。その贅沢はエスカレートし、ある時、有馬から毎日200桶の温泉の湯を馬の上に乗せ、吹田殿に運ばせたという。山荘に川の流れを引き込み、その河原で、有馬の湯にひたつたのである。

## 西園寺家の財力の根拠は「関東申次」にあった

しかし、なぜ、西園寺公経は、こんな、とんでもない散財を行うことができたのだ

ことになる。僕は、中口久夫説に賛同したいと思う。

## そして、吹田殿は寂れていった

さて、吹田殿の幻に誘惑されて、今、僕は神崎川の畔を散策している。護岸がコンクリートに固められた今の神崎川だが、その水の流れば一度も絶えたことがなかったはずだ。水の音に耳をすませば、吹田殿の賑わいが聞こえてきそうな気がする。

繁栄を誇つた吹田殿も、鎌倉から室町時代にかけて、荘園には悪党と呼ばれるアーナーキーな人々があふれ、危険な場所となつていった。

これみよがしの貴族の遊興に、民衆が嫌気をさすこともあつたはずだ。ふと、有馬から毎日200桶の温泉の湯を運ばさ



大の木と吹田殿址。樟の老木は枯れて尚、700年の歴史を伝えようとしている



これみよがしの貴族の遊興に、民衆が嫌気をさすこともあつたはずだ。ふと、有馬から毎日200桶の温泉の湯を運ばさ

■参考資料■  
 「吹田殿はどこにあったか」 中口久夫著 吹田図書館  
 「網野善彦著作集第三巻・荘園公領制の構造」岩波書店  
 「続・日本の歴史をよみなおす」 網野善彦著 筑摩書房  
 「吹田市史」第一巻・第四巻  
 「好きやねん史・すいた千里」 池田半兵衛著 創芸出版  
 「さりえさんば吹田」吹田市長 公室広報課 編集と発行

報収集と見ることもできそう。その莫大な経費の幾分かは、鎌倉幕府から出ていたかも知れない。西園寺公経は、公家の利益代表のはずだが、内実は、鎌倉幕府につながっていた。だとすれば、贅沢な山荘の遊びは、公家たちの鎌倉幕府に対する憤懣を骨抜きにするという役割ともなる。たしかに、公家たちは、酒や女、そして和歌や舞踏にひたすらに溺れていた。このように、西園寺家を鎌倉武家たちのスハイとして見ると、吹田山荘における「乱舞」の意味が見

えてくる。  
**吹田殿は どこにあったのか**  
 とここで、吹田殿の場所についてだが、現在の「大の木神社」に対して異説を唱える人が多い。例えば、中口久夫は「吹田殿はどこだつたか」という論文で高浜神社の西側という説を紹介している。その位置は「陰陽五行説」に照らし合わせ、「北に玄武の山(千里丘陵)、東に青龍の河(神崎川)、西に白虎の大道(高槻街道)をひかえていて、残る朱雀の池

を別荘の南庭」となっている。四方に四神の守りを配置することは、当時の都づくり、山荘づくりの思想そのものだったと推測できそう。高浜神社の西辺が吹田殿の場所とされるもう一つの理由は、「河に臨んだ松林の場所」であることによる。高浜神社の場所は、「吹田砂堆」という砂の微高地で、砂地であることから松の名所となつていた。西園寺公経制作の京都の鳥羽離宮の再現図を見ると、やはり、平安京の都づくりに影響され、四神に方位を守る設計になつてい。西園寺公経にとつての別荘とは、自然の中に描かれた小宇宙という

ことになる。僕は、中口久夫説に賛同したいと思う。

れた人々の行列を思いおこす。彼らは、きっと、貴族たちに嫌悪の情を持つていただろうと僕には思える。時代は、武士の世から、戦国時代に向かい、貴族の生活も大きく変化していく。そして、貴族たちはいなくなつた。吹田殿の主、西園寺家は、その重要拠点だつた四国の宇和島の戦国大名として名をはせる。明治にも、その子孫が皇族として政界で活躍した。